

# 数値解析と複素関数論・佐藤超函数論 Fourier 変換の数値計算を通して

緒方 秀教

電気通信大学 大学院情報理工学研究科 情報・ネットワーク工学専攻

2021 年 5 月 22 日 (土)

## 今回のテーマ

数値解析と

複素関数論・佐藤超函数論（複素関数論に基づく一般化関数の理論）.

**複素解析関数**（正則関数）とは？

- 複素関数として微分可能（Cauchy-Riemann の関係式）.
- 実用上現れる関数は解析関数が多い  
（多項式，三角関数，指数関数，特殊関数，…）.
- 遠く離れた2点での値が密接に結びついている。
  - Cauchy の積分定理
  - 留数定理（→実積分の計算への応用）.

数値解析における複素解析関数の意義を  
Fourier 変換の数値計算を通して考えてみたい.

# 今回の内容

- ① Fourier 変換：数値計算の難しさ
- ② Fourier 変換の数値計算
- ③ 数値例
- ④ Fourier 変換計算と複素関数論
- ⑤ Fourier 変換計算と佐藤超関数論
- ⑥ まとめ

# (1/6) Fourier 変換 : 数値計算の難しさ

関数  $f(x)$  の Fourier 変換

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \int_{-\infty}^{\infty} f(x) \exp(-2\pi i \xi x) dx.$$

- 科学技術研究で重要である（振動波動現象 etc.）.
- 減衰の遅い関数  $f(x)$  に対しては、  
従来の数値積分法では計算が難しい.

# (1/6) Fourier 変換 : 数値計算の難しさ

DE 公式による減衰の遅い関数の全無限区間積分の数値計算例.

$$(1) \int_{-\infty}^{\infty} \frac{dx}{1+x^2} = \pi (= 3.14159\ 26535\ 89793\ \dots).$$

標本点数	計算値	誤差
13	<u>3.14168 64575 30666</u>	$3 \times 10^{-5}$
21	<u>3.14159 25866 30724</u>	$2 \times 10^{-8}$
39	<u>3.14159 26535 89794</u>	$3 \times 10^{-16}$

# (1/6) Fourier 変換 : 数値計算の難しさ

DE 公式による減衰の遅い関数の全無限区間積分の数値計算例.  
振動積分 (Fourier 変換) の場合.

$$(2) \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\cos 2\pi x}{1+x^2} dx = \pi e^{-2\pi} (= 1.15572\ 73497\ 90922 \dots).$$

$h$	標本点数 $N_+ + N_- + 1$	計算値	誤差
1	13	1.58125 37966 15643	$4 \times 10^{-1}$
$2^{-1}$	21	1.34196 68485 53180	$2 \times 10^{-1}$
$2^{-2}$	39	1.11369 34847 54938	$4 \times 10^{-2}$
$2^{-3}$	73	1.26481 85622 97596	$9 \times 10^{-2}$
$2^{-4}$	143	1.17117 00197 53101	$1 \times 10^{-2}$

振動積分は一向に収束しない。

## (2/6) Fourier 変換の数値計算

どうすれば Fourier 変換を計算できるだろうか？

Fourier 変換を次のように書き直す：

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \lim_{\epsilon \rightarrow +0} \left\{ \int_{-\infty}^0 f(x) e^{-2\pi i(\xi + i\epsilon)x} dx + \int_0^{\infty} f(x) e^{-2\pi i(\xi - i\epsilon)x} dx \right\}$$

右辺の積分：指数関数的減衰する因子  $\exp(-2\pi\epsilon|x|)$  を含む。

## (2/6) Fourier 変換の数値計算

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \lim_{\epsilon \rightarrow +0} \{ \mathfrak{F}_+[f](\xi + i\epsilon) - \mathfrak{F}_-[f](\xi - i\epsilon) \},$$

$$\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta) = \pm \int_0^\infty f(\mp x) e^{\pm 2\pi i \zeta x} dx \quad (\pm \operatorname{Im} \zeta > 0).$$

- $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  は上/下半平面  $\pm \operatorname{Im} \zeta > 0$  における**解析関数**である。
- $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  の被積分関数は**指数関数的減衰する因子**  $\exp(-2\pi |\operatorname{Im} \zeta| x)$  を含むので、**従来の数値積分公式**で計算できる。



## (2/6) Fourier 変換の数値計算

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \lim_{\epsilon \rightarrow +0} \{ \mathfrak{F}_+[f](\xi + i\epsilon) - \mathfrak{F}_-[f](\xi - i\epsilon) \},$$
$$\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta) = \pm \int_0^\infty f(\mp x) e^{\pm 2\pi i \zeta x} dx \quad (\pm \operatorname{Im} \zeta > 0).$$

- $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  は上/下半平面  $\pm \operatorname{Im} \zeta > 0$  における**解析関数**である.
- $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  の被積分関数は**指数関数的減衰する因子**  $\exp(-2\pi |\operatorname{Im} \zeta| x)$  を含むので, **従来の数値積分公式で計算できる**.

### Fourier 変換の数値計算法

- 1 上/下半平面  $\pm \operatorname{Im} \zeta > 0$  で**解析関数**  $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  を従来の数値積分公式で計算する.
- 2 解析関数  $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  を実軸上に**解析接続**する (定義域を広げる).
- 3 Fourier 変換  $\mathcal{F}[f](\xi) = \mathfrak{F}_+[f](\xi) - \mathfrak{F}_-[f](\xi)$  を得る.

## (2/6) Fourier 変換の数値計算

### Fourier 変換の数値計算法

- ① 上/下半平面  $\pm \operatorname{Im} \zeta > 0$  で解析関数  $\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta)$  を計算する.

$$\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta) = \pm \int_0^{\infty} f(\mp x) e^{\pm 2\pi i \zeta x} dx \quad (\pm \operatorname{Im} \zeta > 0).$$

上/下半平面  $\pm \operatorname{Im} \zeta > 0$  に点  $\zeta_0^{(\pm)}$  を適当に取り,  
 $\zeta_0^{(\pm)}$  における  $\mathfrak{F}_{\pm}(\zeta)$  の Taylor 級数を求める.

$$\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta) = \sum_{n=0}^{\infty} c_n^{(\pm)} (\zeta - \zeta_0^{(\pm)})^n,$$

$$c_n^{(\pm)} = \pm \frac{1}{n!} \int_0^{\infty} (\pm 2\pi i x)^n f(\mp x) e^{\pm 2\pi i \zeta_0^{(\pm)} x} dx \quad (n = 0, 1, 2, \dots).$$

被積分関数は指数関数的減衰する因子  $\exp(-2\pi |\operatorname{Im} \zeta_0^{(\pm)}| x)$  を含むので,  
従来の数値積分公式で計算できる.

## (2/6) Fourier 変換の数値計算

### Fourier 変換の数値計算法

- 2 解析関数  $\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta)$  を実軸上に解析接続する (定義域を広げる)。
- 3 Fourier 変換  $\mathcal{F}[f](\xi) = \mathfrak{F}_{+}[f](\xi) - \mathfrak{F}_{-}[f](\xi)$  を得る。

前項で求めた Taylor 級数を連分数に変換して解析接続を行う

$$\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta) = \frac{a_0^{(\pm)}}{1 + \frac{a_1^{(\pm)}(\zeta - \zeta_0^{(\pm)})}{1 + \frac{a_2^{(\pm)}(\zeta - \zeta_0^{(\pm)})}{1 + \ddots}}}$$

- 一般に連分数関数は Taylor 級数より収束域が広い。
- Taylor 級数  $\rightarrow$  連分数 : 「商差法」を用いる。

## (3/6) 数値例

$$(1) \quad \mathcal{F}[(1+x^2)^{-1}](\xi) = \pi e^{-2\pi|\xi|},$$

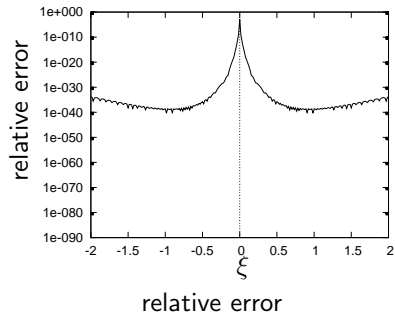
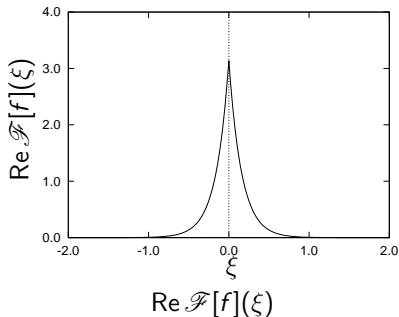
$$(2) \quad \mathcal{F}[\tanh(\pi x)](\xi) = -i \operatorname{cosech}(\pi\xi),$$

$$(3) \quad \mathcal{F}[\log|x|](\xi) = -\gamma\delta(\xi) - \frac{1}{2|\xi|}.$$

- 本研究の方法で Fourier 変換  $\mathcal{F}[f](\xi)$  を計算し、誤差を調べた。
- 多倍長演算 (10 進 100 桁)。
- $\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta)$  の Taylor 係数 : DE 公式で計算。
- 次の論文から結果を引用。

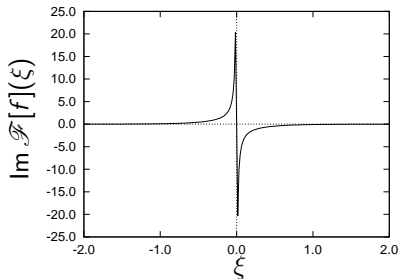
H. Ogata: Numerical calculation of Fourier transforms based on hyperfunction theory, *Journal of Computational and Applied Mathematics*, **378** (2020) 112921, DOI: 10.1016/j.cam.2020.112921

# (3/6) 数值例

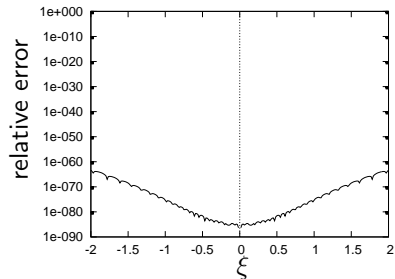


$$(1) f(x) = (1 + x^2)^{-1}, \mathcal{F}[f](\xi) = \pi e^{-2\pi|\xi|}.$$

# (3/6) 数值例



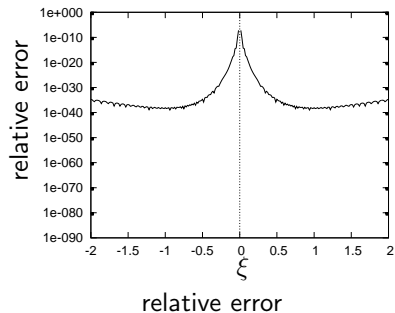
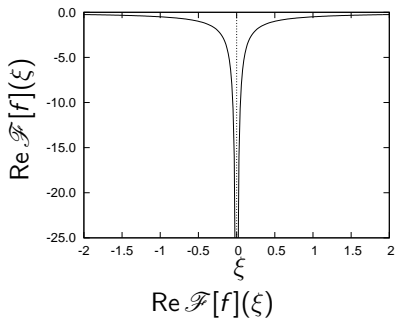
$\text{Im } \mathcal{F}[f](\xi)$



relative error

$$(2) f(x) = \tanh(\pi x), \mathcal{F}[f](\xi) = -i \operatorname{cosech}(\pi \xi).$$

# (3/6) 数値例



$$(3) f(x) = \log|x|, \mathcal{F}[f](\xi) = -\gamma\delta(\xi) - \frac{1}{2|\xi|}.$$

以上の数値例から，本方法の有効性が示された。

## (3/6) 数値例 (比較実験)

- 既存の方法との比較.
  - (杉原) Richardson 補外& DE 公式.
  - (大浦・森) 振動積分に特化した DE 公式.
- $\mathcal{F}[f](\xi = 1)$  を計算した.
- $\epsilon$  : 相対誤差,  $N$  : 関数  $f(x)$  の計算回数.



### (3/6) 数値例 (比較実験)

- 既存の方法との比較.
  - (杉原) Richardson 補外& DE 公式.
  - (大浦・森) 振動積分に特化した DE 公式.
- $\mathcal{F}[f](\xi = 1)$  を計算した.
- $\epsilon$ : 相対誤差,  $N$ : 関数  $f(x)$  の計算回数.

$f(x)$		(1) $(1+x^2)^{-1}$	(2) $\tanh(\pi x)$	(3) $\log x $
本方法	$\epsilon$	$3 \times 10^{-39}$	$5 \times 10^{-76}$	$9 \times 10^{-39}$
	$N$	1242	1202	1252
杉原	$\epsilon$	$1.4 \times 10^{-19}$	$9 \times 10^{-20}$	$4 \times 10^{-20}$
	$N$	27072	53114	35280
大浦・森	$\epsilon$	$7 \times 10^{-63}$	$5 \times 10^{-57}$	$1 \times 10^{-69}$
	$N$	1690	1618	1698

既存の方法と比べて, 本方法は有効であることがわかる.

## (4/6) Fourier 変換計算と複素関数論

Fourier 変換の数値計算法の話を整理する.

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \int_{-\infty}^{\infty} f(x)e^{-2\pi i\xi x} dx = \mathfrak{F}_+[f](\xi + i0) - \mathfrak{F}_-[f](\xi - i0),$$

$$\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta) = \pm \int_0^{\infty} f(\mp x)e^{\pm 2\pi i\zeta x} dx \quad (\pm \operatorname{Im} \zeta > 0).$$

- 1 実軸上の実関数  $\mathcal{F}[f](\xi)$  よりも  
複素平面上的複素関数  $\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta)$  の方が計算しやすい.
- 2 前項の複素関数  $\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta)$  を実軸上に解析接続して, Fourier 変換  $\mathcal{F}[f](\xi)$  を求める.
- 3 これが可能なのは,  $\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta)$  が複素解析関数であるからである.

## (4/6) Fourier 変換計算と複素関数論

$\mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta)$  は上/下半平面  $\pm \operatorname{Im} \zeta > 0$  での解析関数である。  
ところで、**複素解析関数 (正則関数)** とは何だったか？

- 複素関数として微分可能 (Cauchy-Riemann の関係式) .
- 実用上現れる関数は解析関数が多い  
(多項式, 三角関数, 指数関数, 特殊関数, …) .
- **遠く離れた 2 点での値が密接に結びついている.**
  - Cauchy の積分定理

$$\oint_C f(z) dz = 0 \quad (C : \text{閉積分路}).$$

- 留数定理 (→実積分の計算への応用) .

**この性質を Fourier 変換の数値計算に利用した.**

## (4/6) Fourier 変換計算と複素関数論

Fourier 変換計算の話に戻ると,

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \mathfrak{F}_+[f](\xi + i0) - \mathfrak{F}_-[f](\xi - i0).$$

- $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  : 上/下半平面  $\pm \operatorname{Im} \zeta > 0$  における複素解析関数.
- $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  : 実軸上よりも複素平面上の方が計算しやすい.
- 複素平面上の値から, 実軸上の値  $\mathfrak{F}_\pm[f](\xi \pm i0)$  を読み取った.

## (4/6) Fourier 変換計算と複素関数論

Fourier 変換計算の話に戻ると,

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \mathfrak{F}_+[f](\xi + i0) - \mathfrak{F}_-[f](\xi - i0).$$

- $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$ : 上/下半平面  $\pm \text{Im } \zeta > 0$  における複素解析関数.
- $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$ : 実軸上よりも複素平面上の方が計算しやすい.
- 複素平面上の値から, 実軸上の値  $\mathfrak{F}_\pm[f](\xi \pm i0)$  を読み取った.

### Fourier 変換計算における解析関数の意義

- 遠く離れた 2 点での値が密接に結びついている.
- 複素平面上の計算しやすい所で計算して, 実軸上での値を見積もる (解析接続).

## 佐藤超函数論

- 佐藤幹夫, 1958 年.
- 複素関数論に基づく一般化関数論.
- **超函数 (hyperfunction)** とよばれる一般化関数  $f(x)$  はある複素解析関数  $F(z)$  の実軸  $\mathbb{R}$  上の境界値の差で表される.

$$f(x) = [F(z)] := F(x + i0) - F(x - i0).$$

$F(z)$  : 超函数  $f(x)$  の**定義関数**.

\* 超函数には Schwartz による流儀もある (distribution).

# (5/6) Fourier 変換計算と佐藤超函数論

## 超函数の例

- Dirac のデルタ関数  $\delta(x)$ .

$$\delta(x) = \begin{cases} +\infty & (x = 0) \\ 0 & (x \neq 0), \end{cases} \quad \int_{-\infty}^{\infty} f(x)\delta(x-a)dx = f(a).$$

$$\delta(x) = \left[ \frac{-1}{2\pi iz} \right] = -\frac{1}{2\pi i} \left( \frac{1}{x+i0} - \frac{1}{x-i0} \right).$$

- Heaviside のステップ関数  $Y(x)$ .

$$Y(x) = \begin{cases} 1 & (x > 0) \\ 0 & (x < 0). \end{cases}$$

$$Y(x) = \left[ -\frac{1}{2\pi i} \log(-z) \right].$$

\* 複素対数関数  $\log z$  は主値 ( $\log x \in \mathbb{R}$  ( $x > 0$ ) なる分枝) をとる.

## (5/6) Fourier 変換計算と佐藤超函数論

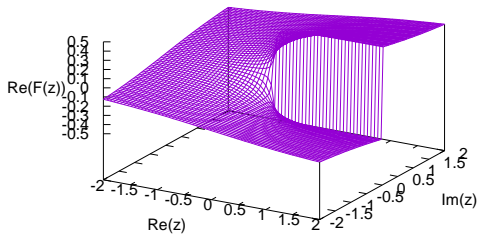
ステップ関数  $Y(x)$  の定義関数

$$F(z) = -\frac{1}{2\pi i} \log(-z)$$

のグラフ. 実軸  $\mathbb{R}$  上の境界値の差

$$F(x + i0) - F(x - i0)$$

がステップ関数  $Y(x)$  を表していることがわかる.





## (5/6) Fourier 変換計算と佐藤超函数論

Fourier 変換の数値計算との関連.

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \mathfrak{F}_+[f](\xi + i0) - \mathfrak{F}_-[f](\xi - i0),$$
$$\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta) = \pm \int_0^\infty f(\mp x) e^{\pm 2\pi i \zeta x} dx \quad (\pm \operatorname{Im} \zeta > 0).$$

複素解析関数  $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  の実軸上の境界値の差！  
これが佐藤超函数論における Fourier 変換の定義.

## (5/6) Fourier 変換計算と佐藤超函数論

Fourier 変換の数値計算との関連.

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \mathfrak{F}_+[f](\xi + i0) - \mathfrak{F}_-[f](\xi - i0),$$
$$\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta) = \pm \int_0^\infty f(\mp x) e^{\pm 2\pi i \zeta x} dx \quad (\pm \operatorname{Im} \zeta > 0).$$

複素解析関数  $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  の実軸上の境界値の差！  
これが佐藤超函数論における Fourier 変換の定義.

### Fourier 変換の計算：佐藤超函数論との関連

- Fourier 変換  $\mathcal{F}[f](\xi)$  は  $\mathfrak{F}_\pm[f](\zeta)$  ( $\pm \operatorname{Im} \zeta > 0$ ) を定義関数とする超函数である.
- 今回示した Fourier の数値計算法は、佐藤超函数論における Fourier 変換の定義をなぞったものである.

## (6/6) まとめ

- Fourier 変換

$$\mathcal{F}[f](\xi) = \int_{-\infty}^{\infty} f(x)e^{-2\pi i\xi x} dx.$$

実は数値計算が難しい.

- (Fourier 変換の数値計算)

$$\begin{aligned}\mathcal{F}[f](\xi) &= \mathfrak{F}_+[f](\xi + i0) - \mathfrak{F}_-[f](\xi - i0), \\ \mathfrak{F}_{\pm}[f](\zeta) &: \text{上/下半平面 } \pm \operatorname{Im} \zeta > 0 \text{ での解析関数.}\end{aligned}$$

実数の世界では計算が難しいものを  
複素数の世界で計算して、実数の世界に戻した (解析接続).

- こんな事ができるのは、複素解析関数は離れた 2 点の値が密接に結びついているからである.
- 佐藤超関数論との関連.